



音楽家、牧野修一の

フリートーク……

65

ピアノ・フォルテ

紫けむる 新雪の

蜂ふり仰ぐ この心

ふもとの丘の 小草をしけば

草の青さが 身にしみる

『新雪』(佐伯孝夫・作詞 佐々木俊一・作曲 灰田勝彦・唄 昭和十七年)

秋がふかい。そろそろどこかの山に、チラチラと雪が降る頃だろう。天氣がいいと、この『新雪』が口から出てくる。

太平洋戦争がたけなわの頃に大ヒットした歌だが、この歌を唄わなかった青少年はおそらく皆無ではないだろうか。現在の若者たちは、この歌の詞を読んで「なにこれ、歌ア？」と不思議がるかもしれない。当たり前のことしかいつてないけど、心がなんとなく清ら

かになるのだ。

今のヒット曲(詞の内容)は昔のと比べて、なんでこんなに違うのだろうと我々年配者は、やっぱり不思議さを感じる。なにを訴えようとしているのかわからんような言葉の羅列で、詞になっていない。ポリウムいっぱい上げた電機楽器と、これまた太鼓にまで電氣を入れて、そのわかんない唄を会場に溢れるほどに集まった若者たちと、ゲンコを振り上げて踊りながら昂奮状態を作り上げている。これは、音楽というジャンルから外れた、別のイベントなのだ。メロディーがきれいでなけりや音楽とはいわない。詞だって、情緒と美しさがなければ詞じゃない。最近の演奏も、男と女の好きだ嫌いだを直接的に表現するから、

ちっともきれいじゃない。こんなに、情緒と美しさが無い音楽若者の時代にしたのは、時代文化の進歩かもしれないけれど、間違っているのではないだろうかねエ…。

淋しく、悲しい気分になるのは私だけじゃないと思うんだけど…。我が家の庭と向こうの「ゆるりらの森」(新根室七月号に書いたかたのりこ画から勝手にいたいた)に秋がきた。

朝の六時。きてる、きてる。アオサギが一羽だけで、必ず枯れた樹の先にとまっているのだ。その樹の下に流れるピッコロ川のクレソンは、新芽も青く、美味そうに盛り上がっている。そこで一句。

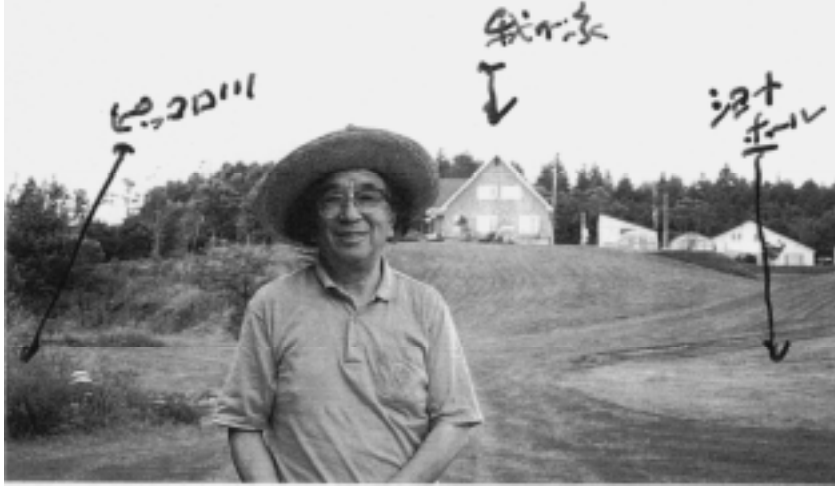
今朝も一羽のアオサギが  
ゆるりら森の 定位置に

ゆるりら森に秋がきて  
ピッコロ川の クレソン食べ頃

どうも、字余りで、我ながら大して上手くない。中味が深くない句なんて、読んでもつまらない。やっぱり、なんでも勉強は必要だ。もう少し年齢を取ってから(まだまだ生きるつもりなんでね)じっくり、句の勉強している人たちのサークルにカデテもらおう。おつと、北海道弁の「カデテ」という言葉はわかんない人もいるだろねエ…。北海道弁っていいんだわア。今、誰もこんな方言なんかは使わないと思う。子どもの頃、パッチ(内地ではメンコ)で遊んでる友だちのところへ寄ってって、「俺もカデレや!」

と、いばって仲間に入っていた。「加手てくれ」と漢字で書くんじゃないかと、私自身で思っているのだが、正しいかどうか。加えてもらう意味であることには違いないはずである。

この「カデレ」という北海道弁のよさは、ちよつと他の地方にはないと思う。東京に五十年近く住んでいたときは、北海道弁を使うことが不自由で(結構使っていた



というよりも、みんなが北海道弁丸出しといってたけど……、つらい思いをしたが、今、たっぷりと気持ちよく出している。東京弁というのではないけれど、子どもが仲間に入れて遊んでもらうときにはこの「カデレヤ」と同じ表現の言

葉は「ボクも仲間に入れて！」となる。この言葉には「スイマセンが私も仲間に入れて遊んでもらえないでしようか」という意味が含まれている。ところが、北海道弁の「カデレヤ」には「俺を入れる」と、もっとおもしろくしてやるぞだから仲間に入れた方が、おまえたち、楽しいぞオ」という言葉はきついが優しさが含まれているのだ。短い言葉の中に深い意味があるのが方言。

「アズマシイ」なんかも素晴らしい方言で大好きだ。東京でこの「アズマシイ」が出たとき、家内にどういう意味かを聞かれたが、どうしても正確に伝えられなかった。こんなところも方言がいいのだねエ。これからも、大好きな北海道弁で楽しく暮らしていこうと思っている。

今日も庭の芝生を、

手押し芝刈り機で二時間。大汗かいてシャワーを浴びた。頭洗って髭そって、体洗って、さて歯でも磨こうと、鏡の前に……。あるわあるわ、小さい瓶から大きい瓶。一番左に立ったチューブを歯ブラシに絞り出して口に入れて、勢いよく磨いた。

「ベーツ、なんだアこれエー」

あんまり大きい声なんで五十嵐君（コウワサービス企画社長）の奥さんとキムチのうまい漬け方を話していた女房が飛んできた。

「あなた！なにしてんのオ。それは私の化粧落としのクリームでしょ。あらっ、この石けん、頭の毛がなんでついちゃってるの？」

「うん？俺、その石けんを頭洗ったモン」

「いやだア。この洗顔石けん、高価いのよオ」

私は石けん一つで、頭も顔も体も洗っちゃう。先日、白いプラスチックの瓶の頭をチョンチョンと押して、石けん液を頭につけてシャンプーをしたとき、

「オーイ、大ママ！この石けん、ちつとも泡たたねえぞオ」

「大パパ！それ、リンソの瓶でしょ。隣に、よく落ちる頭髮シャン

プーって書いてる瓶、あるじゃないのオ。ちゃんと見て洗ってよ」

「俺、眼つぶったまんまだべや。そんなの見てられるかア……」

なんでこうも、いろいろと分けて石けんを作ってるのか。私が若い頃は一つの石けんだけで充分だったし、その石けんだって貴重品だった。

五十嵐君の奥さんが、この様子を見て大笑い。

「大ママ！私の家に、先生にピツタリの石けんあるから持ってきてあげてよ。頭洗って、顔洗って、体洗って、歯も磨けるんだからア……」

後日、さっそくその石けんを持ってきてくれた。

「おおオ。これ、俺にバッチリだア。歯まで磨ける石けんなんてスゲーや。なんぼ高価くても、俺、これに決めたわ。楽だなア。最高だな」

アミノ酸の固まりだそうで、今はこの石けんが助かっている。いつか、ホテルの温泉で洗っている俺を見た人は、「あの爺さん、ちよっとおかしくなってるんでないかア？石けんを歯まで磨いてるぜ」って驚くべなア……。それにし

ても不思議な世の中になっちゃって、年寄りの私たちは、わけ分からなくなっちゃったなア…。

今年も私が毎年やってきた三つの、大きいイベント（「標津水・キラリ祭り」「大地のど自慢」「もっと、北海道CD制作」）も九月で終わった。

先日開催の「大地のど自慢」は楽しかった。今回は「シルバー元氣祭り」と銘打って、唄で年寄りに元気になってもらおうと力を入れて、実行委員会の皆さんが頑張ってくれ、中標津町総合文化会館を立ち見の出るほどの入場者を集めてくれました。そして、見てくれた会場の皆さんの心が暖かかった。一応、のど自慢でのコンテストなんで、テープ審査で出場が決まった二十九人の唄う人たちの中から、優勝者を出さなけりゃならない。したがって、点数をつけて選ぶことになっている。唄に点数などつけるなんて私は反対だが、だけど仕方がない。六時からミニシルバー（五十〜六十歳）の部、シルバー（六十一〜七十歳）の部、ゴールドシルバー（七十一歳以上）の部。歌謡曲・ポピュラー（年齢制限なし）の部の四部構成

でスタート。みんな気持ちよさそうに唄って、客席の拍手も盛大だった。

シルバーの部のトップバッターは札幌出身の紳士。ダブルの背広も似合う、恰幅のいい男性。その昔、藤山一郎という上野音楽学校（現在の国立芸術大学）出身の美声のテノール歌手が唄った「長崎の鐘」をイントロに続いて唄い始めて五小節目であった。歌詞が出てこない。私も会場のお客さんたちもハツとした。本人、頭を下げて、「スイマセン。出てきません」で、退場してしまったのだ。

これで、この選手は失格となる。可哀相に、会場いっぱいお客と大拍手に圧倒され、緊張の結果、頭の中が真っ白になったのだろう。ところが、

「もう一度やってエーッ」  
「出ておいでーッ」

暖かい会場の声援と拍手が鳴り渡った。司会者に促されて再登場。今度は、小さく畳んだ紙を持って、最後までしっかりと唄い終わった。またも会場の暖かい拍手。

「よかったよー」  
彼はなにか泣いているように見えた。

「こないいいカラオケコンテストは、中標津でなきゃ見れんわ」  
レコード大賞の審査委員長をやっている小西良太郎（現NHK演歌番組司会、評論家）がつぶやいている。

ゴールドシルバーの部も、歌謡曲、ポピュラーの部も、楽しく無事終了。開会の祝辞をしてくださった、知事代理の能田文男根室支庁長も忙しいのに最後までいて楽しんでくれてうれしかった。今回の四部門の中から選ぶグラプリも四人の審査員の気持ちが一致してゴールドシルバーの部から、七十四歳の成澤スズエさんに決定したのである。審査員の作曲家・岡千秋（演歌作曲家の中で現在一番の売れっ子）が、隣に座っているジョージ広田（北海道カラオケ講師会会長）と、

「東京や大阪でのカラオケコンテストじゃ、ありえないわ。このお婆ちゃんがグラプリだもねえ。まあ、牧野のオヤジじゃ仕方ないかア…」

「いや、まったく」  
二人とも納得している。

九月十一日（木）の朝刊、北海道新聞（道東）に大きい写真入の記事

が出ていた。「成澤スズエ（七十四歳）さん「まるで夢を見てるよつです」と、目につくすら涙を浮かべながら受賞を喜んだ」との記事であった。

やっぱり、この「大地のど自慢」、やってよかったなア…。実行委員長の阿部俊勝君、そして実行委員の皆さん。中標津、別海、標津、羅臼町、四町の商工会、観光協会、北海道コカコーラ・ボトラーズ（株）、トヨタ自動車（株）、アサヒビール（株）、エア・ニッポン航空、スポーツ・ニッポン新聞、釧路新聞、読売新聞根室通信部、（有）総合企画のご後援を心から感謝申し上げます。

来年もやれるといいけどなア。さて、秋が過ぎて、寒い冬が近づいているけど、シルバーの皆さん！歌を唄って元気で頑張っちゃ。

